



土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

目 次	内 容 / 執筆者	掲載頁
発刊の辞	「土木史フォーラム」の発刊に寄せて	1
フォーラム	土木技術としての歴史研究	2
地域のニュース	五十嵐 日出夫 神戸から 神 吉 和 夫 福島県に残る一里塚 知 野 泰 明	3
海外土木史	テムズトンネルの補修を巡る論争	4
関連学会ニュース	地盤工学会 / 技術史教育学会 / 日本建築学会	4
学会の動き	土木史に関わる受託研究・調査業務	5
土木史研究発表会	第15回土木史研究発表会報告	6
	第16回土木史研究発表会の開催と論文募集	7
土木史関係図書	日本土木史関係 - その1	7
行事紹介	「新しい耐震設計の考え方と文化遺産、景観」	8

発 刊 の 辞

「土木史フォーラム」 の発刊に寄せて

土木史フォーラム小委員会委員長
武部 健一

土木は、大地にその痕跡を残しつつ人類の発展に寄与してきました。それは国土と地球の歴史的遺産であります。その土木が成し遂げた足跡をたどり、その意味を考えるのが土木史研究です。それはやがて体系化し、土木史学として位置づけられることになるでしょう。

近年、土木史の研究はそれ自身が盛んになっただけでなく、その発展が社会から期待されています。それは国土開発にあたって、生活環境や自然環境との調和だけでなく、歴史環境との調和もまた強く求められることとなり、国土の歴史的遺産を継承しながら新しい国土環境を創造することが要請されるようになってきたからです。

土木史の研究は、これまで土木学会が中心となって進められてきました。例えば1936年に学会が刊行した「明治以前日本土木史」は、その顕著な業績の一つです。この大著は、単に技術界にとどまらず、江戸時代までの国土や民族の歴史に関心を持つ文学、芸能などを含めた各界の識者に広く愛用され、貴重な文献として現在に至ってもなお版を重ねているほどです。

また学会の土木史研究委員会によって毎年実施されている土木史研究発表会は、すでに15回を重ね、発表者の総数は400名を超え、日本国内のみならず、広く海外の土木史事例にわたって数多くの

研究発表がなされて、研究発展に大きく貢献してきました。

土木史研究の発展は、土木史を専門的に研究しようとする人たちとともに、他の研究や業務の傍らで土木史に興味を持ち、自らもこれに参加してきた研究者、愛好者たちによっても支えられてきました。

土木史研究にはまた、歴史学、考古学、地理学、民俗学、文学その他の人文科学分野や、さらに建築学、機械工学その他の近隣諸工学分野との研究交流が不可欠です。

土木史研究委員会では、土木史研究をより広く発展させる交流の場として、このたびニュースレター「土木史フォーラム」を発刊することとしました。これは本委員会のニュースレターとして、委員会活動はもとより、土木史ならびに関連諸研究分野の情報を提供するだけでなく、これまで相互交流の機会の少なかった研究者、愛好者たちに、みずから参加し、情報を発信、交換する場を提供しようとするものです。

当面は年3回の発行とし、関係のみなさまにお送りする予定です。今後このニュースレターを積極にご活用になり、土木史研究に役立てていただければ幸いです。

土木技術としての 歴史研究



土木史研究委員会委員長 五十嵐 日出夫
(北海学園大学)

小樽運河問題が投げかけたもの

いま、小樽運河周辺は朝も9時頃になると、観光客のそぞろ歩きが引きも切らない。古い石造倉庫を改造したレトロ趣味のレストラン、しゃれた造りの土産物店にはお客が詰めかけている。運河はまさに小樽のまち起しの最大拠点である。

しかし、かつてこの運河に沿う臨港線道路の建設をめぐる、市民の意見は運河の現状保存派と道路への改築派の真っ二つに割れ、札幌や東京、あるいは京都の建築学者、ジャーナリスト、文化人等も巻き込んで、いわゆる「小樽運河を守る会」11年闘争が勃発した。「守る会」の道路への改築反対理由は大まかに言えば、小樽市に提出された陳情書によると、運河は小樽の歴史そのもので、そこにそのままであることに価値がある。

運河のヘド口を除去してきれいにすれば、小樽最大の観光拠点としてよみがえらせることができる。守る会が提案する代替ルートを市民的立場で検討して欲しい、の三つであった。

ここに在来の土木技術者でも、¹⁾について、まずまずは答えることができる。しかし、事件の発端になっている²⁾の歴史的価値の問いかけについては残念ながら今でも明快に答えることができない。

これまでの土木史研究が、どちらかと言えば、価値からの自由を念頭においた科学的方法論による歴史研究であり、価値の創造を目指した技術的方法論による歴史研究ではなかったからである。

土木技術としての歴史研究

日本が世界に誇る発明品として水晶腕時計がある。全世界のこの種のムーバーの40%は日本で生産している。この機構には水晶のピエゾ現象の原理を使っているが、これは1883年にフランスのピエール・キュリーによって発見されたものである。しかしその後、100年くらいは眠ったままで、だれもそれを大々的な実用に結びつけようとはしなかった。我々日本人の先輩が、これを腕時計に

応用して、今ではわずか700円足らずで、正確な腕時計を、しかも文房具屋や雑貨店でも買うことができる。これで我々の日常生活はいかに安心なものになっただろうか。ねじ巻天府式時計では値段が高い上に、しばしばラジオの時報などに合わせて、時刻を調整しなければならなかったから、いつも約束などに遅れてしまうのではないかという不安があった。

元来、科学では新しい発見とか認識が尊重される。しかし技術では、この発見とか認識の上に立った発明とか創造が重視されるのである。土木は科学技術である。科学に基礎をおいた技術なのである。ところがこれまでの土木史研究は、科学的方法論にとらわれるあまり、過去の遺物の発見や歴史的事実等の認識を重視して、その発見や認識を根拠として予想される歴史学的原理や法則、あるいは傾向等の推理を軽視しがちであった。これではピエゾ現象の発見はあっても、水晶時計の発明には結びつかなかったように、遺物の発見や事実の認識があっても、それが土木技術の発展に中々結びつかず、いわんやこれからの土木技術者の在り方などに重大な指針を与えるようなことなどには概して無力である。

しかし、小樽運河問題は我々にこの価値に関係する歴史学的な推理の必要性を投げかけた。

これに対する解答は土木史の純粋歴史学的研究に加えて、土木技術としての応用歴史学的研究をすることによって得られるのである。



神戸から

神戸大学 神吉 和夫

兵庫県南部地震と近代土木遺産

神戸の近代土木遺産では新湊川の会下山隧道西坑口が全壊した。隧道本体の被害は小さい。新湊川は以前から改修計画があったが、激特事業としての改修が決まり隧道の存続は微妙である。港湾施設は壊滅的打撃。旧神戸居留地の煉瓦造り下水道は、震災後も雨水管渠として機能しているようだが、被害状況は不明。神戸の水道の象徴である布引ダム(五本松堰堤)、烏原ダム、砂子橋、水の博物館となっている奥平野浄水場急速濾過池は無事。ソリッド・リブ・タイド・アーチ橋としては現存最古の天神橋、明治期に造られた現存最古の可動橋の和田旋回橋も無事。

羽淵橋の移設工事了

兵庫県朝来町にある羽淵橋は、国指定重要文化財の神子畑橋とともに現存最古の全鉄製アーチ橋で兵庫県指定重要文化財である。河川改修にともない、近くの公園に移設保存が決められたが、ようやく工事が終わり、周辺の環境整備を待って、来年早々には一般公開される。現地保存の神子畑橋では上部構造しかわからなかったが、羽淵橋は移設保存のため下部構造も判明した。工事に携わった橋梁技術者は、隠れたところすごいことをしているとしきりに感心していた。工事は建築系の(財)建築研究協会。

文部省科学研究費

私事であるが、平成7年度に土木史関係の課題3件(分担2、代表1)で文部省科学研究費を得ている。最近、土木史が学問領域として認知されたと感じる。



福島県に残る一里塚

日本大学 知野 泰明

徳川幕府は慶長9(1604)年から、主要五街道の整備に着手し、基点である日本橋から約1里(約4km)ごとの街道の両側に一里塚を配置した。

福島県では、2基の一里塚が完成しており、その1つに奥州街道の須賀川・一里塚がある。これは、街道を挟んで、高さ約4m(写真-1)と約6mの2つから成り、これらを含んだ区間約160mの街道が史跡として保存されている。街道は両側に側溝を持っており、断面規模を実測したところ、約7mの道路幅と、深さ約55cm、幅約1mと深さ約35cm、幅約80cmの側溝であった。近世の街道規模を知る上で興味深い事例である。奥州街道の並木の様子を伝える史蹟としては、郡山から北へ向かった次の宿場・日和田付近に残る松並木があり(写真-2)、4.3kmの区間に渡って約300本の立派な赤松が続いている。

この他、米沢街道では塩川町、別府の一里塚が完存し、径約14m、高さ約2.8mとなっている¹⁾。また、双葉郡富岡町の陸前浜街道と、越後街道の耶麻郡西会津町にそれぞれ遺存している。

一里塚や近世の街道の多くは近代の道路拡幅で失われたが、須賀川・一里塚の場合には、幸いにも拡幅時にルートを変更して、一部ではあるが街道の規模を今に伝えながら現存している。こうした、一見、忘却された史蹟も、日本の道路技術を知る上で貴重であり、更には土木遺産としての価値を秘めているのではなかろうか。

参考文献：1) 福島民報社・福島大百科事典発行本部編、「福島大百科事典」、福島民報社、p.74、1980。

写真 - 1 →
須賀川・一里塚
(西側)
撮影・知野泰明

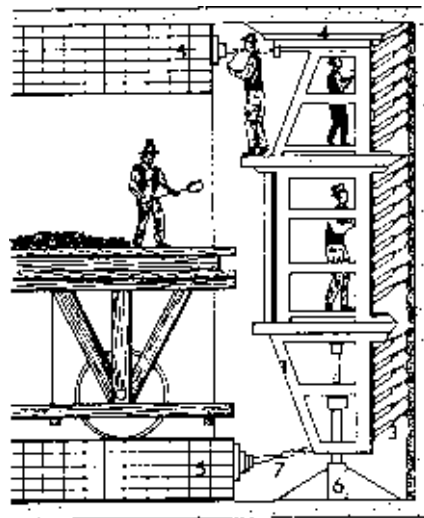


← 写真 - 2
日和田付近の
松並木
撮影・知野泰明

テムズトンネルの補修を巡る論争

テムズトンネルは1843年に開通した世界初のシールド工法（図参照）による水底トンネルでブルネル父子によって建設されたものである。現在はロンドン地下鉄の一部となっており、このトンネルを含む路線である東ロンドン線全体の補修計画の一環としてトンネルの補修工事が計画された。工事は、レンガの覆工の上に防水層と20cm厚のコンクリートの吹きつけ（ショットクリート）を行うもので昨年末に実施の発表がされ、トンネル開通のちょうど152年後の今年の3月25日に開始される予定であった。しかし、歴史的建築物保存の見地から工事の実施には多くの疑問が提示されて未だ着工には至っていない。施主のロンドン地下鉄会社、近隣開発のロンドンドックランド会社などの推進派に対してイングリッシュ・ヘリテッジ、英国土木学会、ヴィクトリア協会、ジョージアン・グループなどから計画の再考を促す主張が繰り返されてきた。特にイングリッシュ・ヘリテッジでは専門家による委員会を設置してロンドン地下鉄会社の計画の照査や代替工法の検討を実施してきた。その結果、補修工事自体が不要であることを主張している。これらは英国土木学会誌、一般新聞上などでたびたび報じられてきた。この間、7月末には環境省の大臣の公聴会の中止

とショットクリート工法支持の発言が報じられる一幕もあったが9月末現在最終結論には至っていない。これまでの状況からすれば、トンネル南側の一部を現況の状態に残して補修工事が実施される公算が強くなってきている。なお、当土木学会土木史研究委員会ではテムズトンネルの歴史的価値を損なうとの理由からショートクリート工法は再考すべきである趣旨の記事をイギリスの新聞 "The Independent"（1995.4.13）に五十嵐委員長名で投稿を行った。



関連学会ニュース

（１）遺跡の保存技術に関するシンポジウム

（地盤工学会）

平成7年4月27、28日の両日、関西大学百周年記念会館において開催された。初日は委員長挨拶に続いて、海外と国内の遺跡の保存技術の現状に関する委員会報告、関西大学文学部の綱干善教授による特別講演、パネルディスカッション、懇親会などが行なわれ、翌日には26編の一般論文の発表が行なわれた。このような遺跡の保存を土質工学的観点から取り組んだ試みはおそらくわが国では初めてであり、斬新で興味深い話題が提供され、各方面から熱心な議論が行なわれて、大変有意義であった。一般論文発表のセッション名を以下に示す。

探査・計測・環境調査、土質・地盤調査、土質工学的特性・記録、材料特性・劣化試験、保存・復元整備、保存整備計画・活用

（地盤工学会：土と基礎，43-10(453)，pp.73-76）

（２）技術史教育学会の発足（技術史教育学会）

平成7年10月28日上智大学総合研究棟9階において発会式が開催された。発会式では、会長挨拶、設立趣旨説明、設立にいたる経過報告および今後の活動内容、規約の審議、技術史教育学会設立承認などが行われた。また、三輪修三先生の記念講演が行われた。

活動目標は、技術史教育学会は、人類社会における

技術を歴史的に、社会、文明、文化および人間の生存の面から考え、教育実践することを理念とする。「技術史の研究」が専門化され、その研究を背景にして教育の内容・方法について、より効果的な理論の構築と教材の精選開発を進める。技術史教育の理念を実現するために多くの人の知恵を結集し、人類に共通する「教育の体系化」をはかる。研究会、講演会、シンポジウム等を開催し、学会誌やニュースレター等を発行することである。

（３）シンポジウム：歴史的資産10万件を

保護するために - 文化財登録制度を考える -

（日本建築学会）

平成7年10月11日建築会館ホールにおいて開催された。シンポジウムでは、各地域の歴史と文化を理解するうえで貴重な資産の文化的意義の周知、永く後生に継承する手だての展望を探る。内容は、文化財指定による現行の保護制度とは別に、登録を通じて保存・活用の対象をより広げることができる制度について、その内容と有効性からわが国に適したあり方まで、展望を探るものであった。シンポジウムのパネリストは、鈴木博之（東京大学、建築史）、西村幸夫（東京大学、都市計画）、亀井伸雄（文化庁）、福田敏朗（京都府、地方行政）であった。

土木史に関わる受託研究・調査業務

表は、最近の土木史に関わる受託研究・調査業務の一覧である。以下に概要を示す。

(1) 80年代初期

は、わが国が欧米先進諸国を目標とした明治維新後30年と戦後30年において、土木技術の発達が社会資本整備にどのように寄与したかを分析した。

は、街路の拡幅工事に伴い取り壊される予定となっていた四谷見附橋を土木史的に評価し、保存を前提とした修復方法について検討した。この成果をもとに、四谷見附橋の移設保存について検討したのが、である。

(2) 80年代後期

は、近代横浜建設の功労者である御雇い外国人のプラントンについて、その業績を評価した。

は、東京の臨海部にある品川台場を保存するための調査を行い、公園として活用するための検討を行った。この経過を受けて、神奈川台場の土木遺構調査が始まった()。

(3) 最近の動き

は、東京の玉川上水の現況を調査し、法面崩壊や危険箇所等を検討した。現在、保存・活用にに向けて東京都で検討されている。

は、土木史研究に重要な文献・資料の調査、データベース化について、港湾を対象に収集整理

した。同様に、個人の業績について文献・資料の収集・整理をし、さらにアーカイブス(資料館の文書庫)の検討が始まった()。

は、全国にある建設省所管の歴史的・文化的土木施設について調査し、土木史的な評価手法を提案したもので、その海外事例の調査がである。このデータベース化と合わせ、文部省科学研究費による近代土木遺産の全国調査(新谷洋二委員長)が連携したことにより、ほぼ全国の土木遺産の網羅が可能となった。

は、北九州市の土木博物館構想について検討したもので、現在は福岡県との共同による海峡ミュージアム構想として引き継がれた。同様の構想は、神戸市からも要請があったが、阪神・淡路大震災の影響で延期されている。各地の土木博物館・資料館の構想は、現在土木学会が80周年記念事業の一環として進めている土木学術資料館の建設とも関連する。

は、近代土木遺産として最初に文化財指定を受けた、碓氷峠旧線鉄道構造物の保存・活用について検討している。

は、地下鉄南北線の開業に併せて、市ヶ谷駅に江戸城外濠を意識した展示コーナーを設計し、現在建設中である。

土木学会での土木史関連受託研究実績

No.	研究名	委員長名	委託先	委託期間
	土木技術の発展と社会資本に関する研究	八十島義之助	総合研究開発機構	1982～84年
	四谷見附橋の保存・修復に関する研究	新谷洋二	東京都建設局	1982～84年
	プラントンに関する調査研究	長尾義三	横浜市道路局	1988～89年
	品川台場の保存・活用に関する調査研究	新谷洋二	東京都建設局	1988～90年
	四谷見附橋の移設保存に関する調査研究	田島二郎	東京都建設局	1991～92年
	玉川上水の現況調査研究	高橋 裕	東京都教育庁	1993年
	港湾歴史文献データベース構築調査研究	寺中啓一郎	運輸省港湾技術研究所	1993～94年
	歴史的・文化的土木施設の調査研究	鈴木忠義	建設省大臣官房	1993～94年
	海外における歴史的土木施設の保存・活用に関する文献等の収集整理調査	-	国土開発技術研究センター	1994年
	社会資本博物館(仮称)構想策定業務	山本 宏	北九州市	1994年
	碓氷峠旧線鉄道構造物の調査研究	田島二郎	群馬県松井田町	1994～95年
	市ヶ谷駅遺跡展示コーナーの設計	新谷洋二	帝都高速度交通営団	1994～95年
	廣井勇博士文献資料収集調査	五十嵐日出夫	寒地港湾技術研究センター	1995～96年
	神奈川台場土木遺構調査	新谷洋二	横浜市神奈川区	1995年

第15回土木史研究発表会報告

第15回土木史研究発表会は、去る平成7年6月9日（金）～10日（土）の両日、長崎大学を会場に開催された。また、前日の8日（木）には、長崎市周辺の歴史的土木施設の見学会も20名を越える参加者を得て実施された。

研究発表会では、論文の発表件数が昨年の31編から60編（審査14、自由46）に増加し、参加者も150名を超え、過去最大規模の大会となった。特に第1日目の近代土木遺産に係るセッションでは、100名弱の参加者で活発な議論がなされた。

また今回は、学校関係者だけでなく企業や官公庁関係者による発表数が増加し、さらに大学院生をはじめとした若手研究者の発表も増加した。また、発表分野も従来まで多かった鉄道、橋梁、河川を対象とした計画史に加え、土木建設技術の変遷に関する技術史、歴史的土木構造物のデータベース化や評価、維持保全に関する研究など、発表件数の増加とともに多種多様にわたった。

こうしたことは、近年土木史研究委員会の中で進められている近代土木遺産の全国調査や各機関からの受託研究の増加など、本委員会内で着実に進められてきた研究成果と昨今の土木史に対する社会的ニーズの増加が反映されたものと考えられる。

このように、本年度の発表会は土木史研究の底辺拡大の傾向を示す、非常に意義のある発表会として大盛況のうちに閉会した。

長崎市周辺の歴史的土木施設の見学会では、岡林隆敏先生をはじめとする長崎大学のみなさんにご案内いただき、西山ダム→本河内高部ダム→眼鏡橋周辺→出島・出島橋→外国人居留地→小菅修船場を見学した。

西山ダムは、吉村長策設計・監督で明治37（1904）年に完成した。現在老朽化が激しいため、ダムの下流に新しいダムが建設され、近代土木遺産として現状保存される予定である（わが国2番目のコンクリート水道ダム）。見学者からは、下流にダムを建設したことによって周辺から西山ダムが見えなくなったことが残念との声もあった。

本河内高部ダムは、吉村長策設計・監督で明治24（1891）年に竣工した。当時長崎市の年間予算の5倍に当たる30万円が投入され（わが国初の水道ダム）、長崎市民の水を支え続けてきた。見学者からは、当時の日本の技術力から考えると、吉村の先見性と卓越した見識に感心する声もあった。

眼鏡橋周辺では、寛永11（1634）～元禄12（1699）年までに架設された中島川石橋群を視察した。見学者からは、新しい石橋では石材の接着剤であるセメントの露出が残念であるとの声もあった。

その他、異国（オランダ→イギリス）の影響が濃い社会資本の状況や港町の構造を概観した。なお、長崎の土木施設見学会は地形条件（坂が多い）から忍耐力のない人には不可能であることを述べておく。



土木史研究発表会

第16回土木史研究発表会の開催と論文募集

期 日：1996年6月6日（木）～7日（金）

会 場：秋田市文化会館（予定）

募集論文内容：テーマは自由（時代、対象、範囲等、すべて自由）

申込方法等：

（1）申込方法：

A4判用紙に「審査付部門（会員のみ）」あるいは「自由投稿部門」と明記し、表題（副題も可）、発表者名・連名者名・所属、会員種別・会員番号、連絡先・電話番号、論文内容「要旨（800字以内）、過去の発表経緯、予定頁数（2016字詰原稿台紙）」セッション分類（別記参照）を記入して申込む。論文頁数は8頁以内、最大16頁まで。原稿台紙、執筆要項等は申込受付後送付。

（2）セッション分類：

（ ）分類：人物史、技術史、社会・経済史（制度史を含む）、土木史一般（考古、研究方法論等を含む）

（ ）分類：教育、測量、施工法、地域・都市、景観、交通（道路、鉄道等）、河川、海岸・港湾、衛生・上下水道、構造物（橋梁、トンネル、ダム等）、防災、エネルギー、農業（灌漑等）、その他

（3）審査付部門：

申込締切：1995年11月30日・消印有効

論文原稿締切：1996年1月22日・消印有効

査読料：10000円。

論文の採否：3月中旬に通知。

本原稿の作成：採用後、1996年4月11日学会必着にて提出。

（4）自由投稿部門：

申込締切：1996年2月29日・消印有効

論文原稿締切：1996年4月11日・学会必着

（5）著者負担金（掲載料）：

例年同様。詳細は下記へ。

（6）申込・問合せ先：

土木学会土木史研究編集小委員会

（〒160 東京都新宿区四谷一丁目無番地、
Tel.03-3355-3433 / FAX.03-5379-0125）

土木史関係図書

この欄では土木史関係図書をご紹介します。今回は日本土木史関係図書をまとめた。

日本土木史関係 - その1

No.	著者	書名	発行者	発行年月日
1	土木学会編	明治以前土木史	土木学会	昭和11年
2	日本工学会編	明治工業史 第2 土木編	日本工学会	昭和4年
3	日本工学会編	明治工業史 第7 鉄道編	日本工学会	昭和5年
4	日本工学会編	明治工業史 提要・索引	日本工学会	昭和2年11月30日
5	土木学会編	日本土木史 大正元年～昭和15年	土木学会	1978年9月
6	土木学会編	日本土木史 大正16年～昭和40年	土木学会	昭和48年10月
7	土木学会編	土木工学の概観 1940-1945	日本学術振興会	昭和21年12月29日
8	土木学会編	日本土木史 1966-1990	土木学会	1995年

「新しい耐震設計の考え方と文化遺産、景観」シンポジウム

土木史研究委員会（委員長：五十嵐日出夫北海学園大学教授）では、質の高い国土づくりに寄与するために、近代土木遺産の全国調査をはじめ、歴史的な土木施設に関する土木史的な評価についての調査・研究を進めております。さて、阪神・淡路大震災後の新しい耐震設計の考え方が検討されている中で、文化遺産や景観から見た場合の歴史的土木施設の保存・活用に関するシンポジウムを下記日程にて開催いたします。

今後のまちづくりを考える中で資するところが大きいと思われますので、多くの方々のご参加を期待します。

主 催：土木学会（担当：土木史研究委員会）
後援予定：鋼橋技術研究会
景観デザイン研究会

日 時：1995年12月19日（火）13：30～17：25

会 場：土木学会土木図書館 2階・講堂

定 員：100名

参加費：2000円

申込方法：参加ご希望の方は、シンポジウム名等を学会誌添付の「行事参加申込書」にご記入のうえ、FAXまたは郵送でお申込み下さい（参加券は用意しておりません）。なお、参加費は下記宛納入下さい。

郵便振替：00160-9-16828 （社）土木学会
（通信欄にシンポジウム名を明記して下さい）

銀行口座：第一勧業銀行四谷支店

普通1004632 （社）土木学会

申込期限：1995年12月1日（金）（先着順）

申込み先：（社）土木学会事務局経理課

問合せ先：（社）土木学会事務局企画広報

室・近代土木遺産シンポジウム係

〒160 東京都新宿区四谷1丁目無番地

Tel. 03-3355-3433 / FAX 03-5379-0125

プログラム：講師は都合により変更されることもあります。

13：30～ 開会あいさつ

土木史研究委員会委員長 五十嵐日出夫

13：40～ 報 告

司会：馬場俊介（名古屋大学教授）

1）新しい耐震設計の考え方

建設省土木研究所耐震研究室主任研究員

運上茂樹

2）既存橋脚の補強の現状と課題

首都高速道路公団保全施設部保全技術課長

富澤修次

3）四谷見附橋は基準をクリアーするか？

熊本大学工学部土木環境工学科助教授

小林一郎

4）明治期の橋梁の煉瓦橋脚について

信州大学工学部社会開発工学科助教授

小西純一

5）近代文化財建築の補強

京都大学工学部建築学科講師

西澤英和

15：20～ 休 憩

15：30～ パネルディスカッション

「新しい耐震設計の考え方と文化遺産、景観」

司 会：土木史研究委員会幹事長 大熊 孝
（新潟大学教授）

パネリスト：

土木史 馬場俊介（名古屋大学教授）

橋梁構造 藤野陽三（東京大学教授）

建 築 西澤英和（京都大学講師）

デザイン・景観 篠原 修（東京大学教授）

17：20～ 閉会あいさつ

土木史研究委員会副委員長

榛澤芳雄

土木学会土木史研究委員会

土木史フォーラム小委員会委員の紹介

委員長

武部 健一（片平エンジニアリング） 地域委員

幹事長

岡林 隆敏（長崎大学）

五十畑 弘（日本鋼管）

神吉 和夫（神戸大学）

常任委員

北浦 勝（金沢大学）

伊東 孝（日本大学）

清水 浩志郎（秋田大学）

小山 茂（日本大学）

中岡 良司（北見工業大学）

昌子 住江（関東学院大学）

馬場 俊介（名古屋大学）

為国 孝敏（土木学会）

藤田 龍之（日本大学）

月岡 康一（川崎重工）

松村 博（大阪地下街）

藤井 郁夫（東京鐵骨橋梁製作所）

宮本 裕（岩手大学）

堀江 興（新潟工科大学）

門田 博知（広島工業大学）

編集後記：創刊号は何とか作ることができました。土木史フォーラムでは、皆様からのホットなニュース、それにこんな企画が欲しいというご要望をお待ちしております。編集担当一同、「皆様のお役に立つニュースレター」を合言葉として頑張りますので、今後ともよろしく願いいたします。ご意見をお寄せください。

土木学会土木史研究委員会監修

土木史フォーラム 創刊号

発行者 土木史フォーラム小委員会

代表者 武部 健一

事務局 日本大学理工学部 小山 茂

〒274 船橋市習志野台7-24-1

T E L 0474 - 69 - 5219 / F A X 0474-69-2581